

# 文化の起源としての共感性

刑部 育子

「共感」という言葉を英語で訳してみると、「Sympathy」あるいは「Empathy」となる。英語のこの二つの「共感」という言葉の違いを調べてみるとおもしろいことが見えてくる。「Sympathy（共感）」は自分と他者とが同化した関係の共感、「Empathy（共感）」は自分と他者との違いを認めた上での共感を示している。この違いに、最近私はとても興味をもっている。というのも、文化的学習として子どもの「模倣」の発達を分析しているうち

に、この二つの「共感」が文化の生成に大きくかわっていることが見えてきたからである。本論では筆者らが行った研究事例（一歳十か月～二歳四か月の乳児を対象）をもとに、同調現象としての「共感（Sympathy）」から、異なる他者理解に変わっていく「共感（Empathy）」の発達プロセスとはどのようなものかを紹介したい（Gyobu & Sekihara, 2005）。

## 模倣の第一段階 相手の動きに共鳴し、同調する子

### どもの動き

夕食を前に母親がダイニングテーブルの上で大根おろしをすっている。すると目の前にいた子どもがこの母親の動きと同調しながら手を動かし始める。その様子に気がついた母親は、子どもを見て微笑みながらその手を止めたり、動かしたりしてみせる。すると子どもの手も合わせるかのようになり、止まったり動いたりする。

このとき子どもにとっては何か一緒にやっているということを楽しんでいるように見てとれる。また、母親も自分のことをまねしている子どもが愛らしく見え、それに気がついて微笑み返す。たまたま子どもが大人の動きに同調するように動かし始めた子どもの行為に対し母親は自分のまねをしていると

捉え、うれしそうに微笑み返すのである。同調行為・共鳴 (Sympathy) の中に人としての文化を味わう相互行為が始まっている。

模倣の第二段階 モノを他者とともを使うことを通

して文化的意味に参加する

子どもがモノに意味を感じ始める過程というのはどのようなことからなのだろうか。次の事例は、文化を背負った大人と子どもの間に意味がつけられていく過程を示している。

祖母がテレビの画面のほこりを雑巾で拭いていると、そばにいたS（一歳十一か月）は洗面所からお手拭タオルをもつてくる。そして祖母の横でよいしょよいしょと手を大きく動かしながら拭いている。祖母は「Sがまねしている」と周りにい

た母親や叔母に向かって言う。

ここで注意しておきたいことは、この時点でSは「お掃除をしている」という大人（他者）の目的を理解しているわけではないということである。自分の大好きな家族たちのやっていることを自分も一緒にやってみたい、参加したいという感じに見受けられる。だから「格好」だけが似ている。実際、Sはテレビを拭く雑巾の代わりに手を拭くためのハンドタオルをもってきて拭いてしまっている。つまり、ハンドタオルの使用の目的とテレビを拭く雑巾との違いがわからず、ただ似たものをもってきているだけなのである。しかし、このことを祖母は「それで拭いちゃだめよ」とは言わず、子どもがまねして一生懸命拭いていることをほほえましく見ている。祖母はそれを周りの家族たちにも報告をしている。

発達心理学者ヴィゴツキーはチンパンジーと人間

の思考の違いがどこからくるのかを  
探求する中で、人間だけがもつ特有

な能力、高次精神機能について注目した。高次精神機能には、「模倣」や「媒介物（道具）」の創造的使用も含まれている。上記の例では、道具の使い方という点でSが他者の目的まで理解してタオルを使用しているわけではないことは明らかである。しかしこの子どもの同調的かかわり（格好だけのまね）に、大人は敏感に文化を感じ取りSが「掃除をまねしているつもりなのだ」という意味づけを行う。このように、「文化」の始まりがまさに子どもの行為に対する大人の意味づけにあるのではないかと私は考えている。

最近、心理学者マイケル・トマセロらは、他者の意図理解と共有が文化の起源であるとする興味深い



論文を発表している (Tomasello et al., in press)。

一方、京都大学霊長類研究所の松沢哲郎氏らによるチンパンジーの親子に見る一連の研究では、チンパンジーの大人と子どもの間にも人間と同様のコミュニケーションがあることを明らかにしている。チンパンジーの親子の間には、コミュニケーションの出发点としてのアイコンタクトもあるし、高い高いをして遊ぶ様子なども見られる。またチンパンジーは人間と同じように道具も使う。このように、大人と子ども、子どもと対象物というそれぞれの二項関係においては、チンパンジーも人間もさほどかわりはない。しかしながら、チンパンジーと人間との間には、子どもと対象物、それにかかわる「大人の行為」という三項関係において、決定的な違いがあると筆者は考えている。

人間の文化的学習との違いについて、トマセロら (一九九三) はイモ洗いをしたことで有名なニホン

ザルの例から次のように述べた。複数のニホンザルがイモ洗いを始めたことは、文化的学習が行われたかのように見えるかもしれない。しかし、もし価値ある文化だとしたらその善さが広まるはずである。

ところがこのイモ洗い行為はその群れの一部のサルに限られ、群れ以外に広がることもなかった。また、新たな形の創造を含みながら世代を超えて累積していくことが人間の文化であり歴史であるとする時、そのようなことに至ることもなかった。このことを筆者なりに言い換えると、このイモ洗いの例は、同調のレベルにおける形だけの同じ行為の発生にすぎない。文化の伝播はなぜそれをするかといのかという文化の善さ(他者の意図)を理解することなしに成り立たない。それが人間にしかできない他者の異なる意図を理解し、共有する「模倣」であり、「Empathy」としての共感」なのである。

さて、大人の子どもの行為に対するかかわり方だ

が、チンパンジーの大人もいたずらする子どもの様子を見守ったりするという点では人間と同様である。しかしながら「模倣」に対する人間の大人のかかり方の違いは、一緒にいる大人が子どもの行為に意味を見出すかどうかということにある。このことを人間の大人は自発的に行う。そして子どもは日々の生活の中で大人が示す文化的文脈に巻き込まれていくのである。人間のシンボル・表象・文化への参加の仕方は、チンパンジーとは大きく異なる。模倣をめぐる大人の子どものかかわりの中に人間の高次精神機能を育てる重要な資源があることがみてとれる。

### 模倣の第三段階 逆役割模倣

今まで大人のまねを同調的に模倣していた子どもは、さらに「相手になってみる」ということをさか

んに行うようになる。Sが二歳になったばかりのころ、弟が生まれ、家族が弟の世話で忙しくなった。Sはその様子を見て、弟の世話にも興味を示し始める。あるとき、Sは弟を抱こうとする。そのとき、父親はまるでS一人が弟を抱いているかのように手を添えてやり、Sの「なりたいたい自分」に一役買う。父親はSの手の延長となってSのやりたいことを達成させるのである。こうした文化の一部を大人が援助する行為は、子どもの意図を察した人間ならではの共感 (Empathy) 的行為である。

四か月後にはSは一人でお気に入りのうさぎの人形を抱いて遊んでいる。家族が弟にしていたように、うさぎを弟の代わりに見立て、哺乳瓶で牛乳をのませるまねをしたり、ゲップをさせたりしている。Sは哺乳瓶をもって「一一〇（ミリリットル飲んだ）」と言っている。

第二段階までの模倣は他者と同じ動きを楽しむ中で行われていた。しかし、第三段階では相手がしたことをするという他者の行為を演じた模倣となっている。そうすることによって、Sは他者の視点に立って世界を見ることを何度も「遊び」の中で経験するのである。そして今度は共鳴し、同化する共感 (Sympathy) ではなく、異なる他者への共感 (Empathy) が始まることになるのである。

模倣の第四段階 人工物の使用には他者の意図が含まれている

人間が加工し創造したものを「人工物 (artifact)」という。ここでは「人工物」を手の延長としての「道具 (tool)」と区別する。チンパンジーは棒を使って穴の中にある蜂蜜をとることができ

る。しかしこの棒は何かの目的のために加工された道具ではなく、蜂蜜にとどかない手の延長 (道具) としてチンパンジーが棒を使ったにすぎない。一方、人工物は人間がある目的のために作り出したものである。われわれはモノからその意図を理解し、ある目的のために使用している。鉛筆は何かを書くために加工されたものであるし、ノートは何か必要なことが書かれるためにつくられたものである。このように、「人工物」には人間の意図が刻み込まれている。すなわち、「人工物」理解の背後には、製作者への意図の共有、すなわち異なる他者に対する共感 (Empathy) がある (Tomassello, et al., in press)。子どもはこうした「人工物」をどのように理解していくのだろうか。以下はその事例である。

Sの持ち物にはデイズニーキャラクターのプー

さんがしばしばついていた。あるとき、夕食の最中、後から仕上がったラザニアを取り出そうと、叔母がプーさんの絵のついたミトンを使おうとした。Sはそれを見つけて「自分のものだ」という顔をして叔母のところへ寄ってきた。叔母は熱くて危ないから「来ちゃいけないよ」と言った。しかし、叔母はラザニアを取り出した後、Sの手にそのミトンをはめてあげた。そしてSはオープンからラザニアを取り出すまねを何度もして見せた。

三か月後、たまたま同じような状況で、叔母はめんどろなのでミトンを使わずに、オープンから熱いものを取り出そうとした。すると、今度はSがミトンを指差し、使わないの？ という顔をしている。叔母は「そうだね、ありがとう」と言ってミトンを手にはめ、ラザニアを取り出した。

ここでおきてい

ることは、当初、

Sはミトンという

「熱いものを取り

出すための道具」、すなわち、ミトンがある目的のために使われる人工物であるということを理解していなかったということである。Sの理解はプーさんの絵の描いてあるものなら自分のものであるということに限定されていた。それは人工物の理解というよりは自分の延長としてのモノだったにすぎない。

しかし、大人とのやりとりの中で、それがプーさんの絵がついていても、ある目的のために使うのだという異なる意図を大人とともに共有することができた。大人はSの意図を理解する一方で、Sの意図とは異なる目的でミトンが使用されることをSに示した。Sはそのことを大人とともに理解し、その模倣を大人の前で披露し、楽しんだ。



さらに、この出来事のあと、叔母が「熱いものを取り出す」という同じ状況でミトンを使わなかったとき、Sはそれを指摘した。ある目的の文脈でミトン（人工物）が使用されることを理解し、認識したSは、そこから外れた行為を見逃すことはなかった。このことはまさに人工物の背景には他者の意図があるということを示していることを示している。ここにも他者とのやりとりや文化的学習の根源に異なる意図をもつ他者を理解する「共感（Empathy）」があることを示していることとつながる。模倣、すなわち文化的学習のプロセスには異なるレベルの二つの「共感」の移行を垣間見ることができる。その移行がまさに「創造物」の生まれる過程である。そして共有された理解の達成を支えるのは異なる他者、大人の存在であるとはいえないだろうか。人間だけが「Sympathy」としての共感」を超えたもう一つの「Empathy」としての共感」に至ること

がでる。

（お茶の水女子大学）

#### 文献

- Gyobu, I & Sekihara, S. (2005) The developmental processes of infant imitation as cultural learning analyzed from a relational view point. International Society for Cultural and Activity Research (ISCAR2005), Seville, Spain.
- Tomassello, M., Kruger, A. & Rainer, H. (1993) Cultural learning. Behavioral and Brain Sciences 16: 495-552.
- Tomassello, M., Carpenter, M., Call, J. Behne, T. & Moll, H. (in press) Understanding and sharing intentions: The origins of cultural cognition. Behavioral and Brain Sciences.